

東海大学第53回海外研修航海実施報告(2023年度)

八木英一郎^{*1}・笹川昇^{*2}・鈴木大樹^{*3}・長泰則^{*4}・山口愛^{*5}・
藤川知栄美^{*6}・三沢大樹^{*7}・清水宗茂^{*8}・稲永敏朗^{*9}・
池谷美衣子^{*10}・Wayne David Devitte^{*11,12}・宮西宏明^{*13}・
松島佑介^{*14}・黒澤純夏^{*15}・千葉雅史^{*16}

Abstract

The 2023 Tokai University Educational Cruise, under the theme “Let’s Go across the Pacific and You Will Discover Something,” was the first cruise in five years to include an overseas destination. The objectives of the cruise were to establish a world and life view for the students based on actual experiences as a result of visiting and learning about countries and regions rarely traveled by individuals, and to develop human connections through living together with approximately 100 other students. In this report, we first described the process of selecting students to participate in the cruise. Then, we report on (1) the activities on board (courses, events, clubs, etc.) and (2) the extensive training at all ports of call. Finally, based on our experience on the 2023 cruise, we make recommendations on the significance and challenges of this distinctive educational cruise.

はじめに

本稿は、東海大学独自の教育プログラムである第53回海外研修航海について報告するものである。海外研修航海は、海洋調査研修船「望星丸」を使用して海外の諸外国を訪問し、多様な自然や文化に触れることで国際的な視野を獲得し、実体験に基づく世界観と人生観の確立を目指すこと、および、船内という限られた空間と環境の中での共同生活を通して、豊かな人間形

*1 (団長) 東海大学経営学部 *2 (副団長) 東海大学工学部
*3 (前半医師) 東海大学医学部付属病院 *4 (後半医師) 東海大学医学部
*5 (看護師) 東海大学附属八王子病院 *6 東海大学情報理工学部 *7 東海大学児童教育学部
*8 東海大学海洋学部 *9 東海大学農学部 *10 東海大学現代文明論センター
*11 東海大学語学教育センター *12 東海大学体育学部 *13 東海大学学長室
*14 東海大学札幌オフィス *15 東海大学静岡オフィス
*16 (スーパーバイザー) 東海大学理系教育センター・工学部

成を図ることを目的に実施されてきた。53回目を数える2023年度は、「行こう太平洋 きつとなにかがある」というテーマを掲げ、学生と院生からなる団員91名（女子31名、男子60名）と教職員からなる団役員14名が、2024年2月21日から2024年3月24日の33日間をかけて、父島、マジュロ（マーシャル諸島共和国）、ヤップ（ミクロネシア連邦）、宮古島の4島を訪問した。また、マジュロにおいては本学の海外研修航海初となる学生学術交流シンポジウムを行った。

本学では長い歴史をもつ海外研修航海であるが、コロナ禍でのブランクがあり、第53回は5年ぶりに海外渡航を伴う研修航海となった（昨年度の第52回は国内の研修航海として実施されている）。また、この5年の間で、海外研修航海事務局や望星丸乗組員における大幅な組織変更や人員の異動により、これまでの経験やノウハウが必ずしも継承されず、第53回海外研修航海では手探りで進めざるを得ない部分や、出航後に準備不足が判明し船上から頻繁に陸上とのメールの送受信を行う必要が生じるなどの課題も明らかになった。さらに、コロナ禍で主流化したICTによって、電子メールやTeamsなどを用いることで業務を進めていくことが標準になった。出港前には、団役員の準備だけでなく乗船する学生たちの準備や交流もTeamsやオンラインが中心になり、新たな方法が模索された。

本稿では、海外研修航海の経糸を次代につなぐことに寄与することを目的に、第53回の経験を記録し報告する。研修航海を継承する上で重要だと考える項目として、まず、本研修に至るまでの道を時系列で報告し、次に、船内での活動（研修・行事・洋上クラブ・生活基盤）、そして、寄港地での研修について報告する。その上で、総括として海外研修航海を着実に継承するための課題について提示する。

1 本研修に至るまでの道

海外研修航海において、出港から帰港までは本研修と呼ばれているが、海外研修航海はこの期間の研修活動のみを指すわけではない。ここでは、第53回海外研修航海の実施が決定し、引率の教職員による団役員会議が始まって以降、本研修に至るまでの過程について、特に学生に関わるものを取り上げて時系列で報告する。

1.1 説明会と参加者募集

海外研修航海について学生にどう広報し参加者を募るかは、常に課題である。第53回では、2023年度春学期終了前の7月に2回、秋学期開始からは12回の説明会を行った。すべて、湘南キャンパスの教室を会場に用い、その様子をZoomで配信し、遠隔参加できるようにした。過去の研修航海の時よりも説明会の期間が2週間程度増えたが、その期間を有効利用できたかは難しいところである。前回の52回の副団長および研修学生にも説明会に参加してもらった。自身の研修の日々を昨日のこのように語る経験者の話には説得力があった一方で、オンラインでの説明会参加の割合が高く、対面での参加者が少数にとどまったため、参加者の反応が読めず手応えを感じることは難しかった。

2023年9月21日（木）から参加申込の受付が開始された。応募する学生数の日ごとの積算値

は決して芳しくなかったものの、結果として、締切日には例年並みの倍率となる申し込みを得ることができた。

対面参加の少なさや学生の反応が読めなかった背景には、コロナ禍で海外研修航海が途絶えており、先輩や経験者の口コミを通じて学生間で海外研修航海について知る機会がほとんど失われていたこと、同時に、大学による広報活動や支援活動も休眠状態にあったことが少なからぬ影響を与えていたと考えられる。学生には「実際に参加申込を行う学生」の他に、「興味はあるが申し込みまで至らない者」「勧められたが申し込みまで至らない者」などの層があるように思われる。海外研修航海について、その情報や経験に触れる機会が通年常設で学内に設けられることが望まれる。また、実際に研修航海に参加した学生が十分に研修効果を実感することが、次の研修航海へ経糸をつなぐ第一歩であるが、その次の段階として、研修経験者が次回以降の海外研修航海の紹介や広報に参加することも必要であり、そのための機会提供や情報共有が課題である。

1.2 学生選考

学生選考の評価観点やその方法は、年度によって異なる。第53回は、学生の面接としてグループ形式を採用した。具体的には、4～5名の学生を1グループとし、まず1人1分の自己紹介を行い、次にグループディスカッションの課題を与え、その議論に15分、最後に議論の結果発表に2分という進行のもと、全体で25分の面接とした。グループ面接と個別の面接を比較すると一長一短があり、個別面接に比べてグループ面接では積極性や協調性の評価がしやすいものの、個々の学生に対して掘り下げて質問する機会が失われる。今回は積極性や協調性を評価することを目指し、一定程度の成果を得たが、選考を通過した学生の中にも本研修時にコミュニケーションが取れずに苦勞する様子を見受けることがあった。

また、面接の際、その様子をTeamsでつなぎ、遠隔でも状況を確認できるようにした。さらにTeamsの録画機能を利用し、後から見返せるようにした。通信状況の不調などの理由により、いくつか遠隔視聴が不可能であったり録画不調であったりしたが、当初の目的は達成できたものと思われる。さらに遠隔視聴が可能とはいえ、面接会場で話を直接聞くに越したことは無い。実際に今回の面接では、札幌・熊本キャンパスには事務局、静岡キャンパスに笹川（副団長）が出向き、かつ、事務局と笹川が湘南キャンパスの面接にも参加することにより、孤立した面接会場で孤立した面接員が独自の基準で採点するという懸念を排除する仕組みの構築を意図した。その結果、全体的には公正で客観的な面接を行うことが出来たのではないかと考える。

こうした面接の結果に加えて書類審査などが行われ、最終的には2023年11月29日に開催された学生選考委員会において、最終的な選考結果を確定し学生に通知された。

1.3 第1回事前研修（研修団結成）

参加が決まったすべての学生を対象に、2023年12月26日には事前研修（研修団結成）を行った。品川、渋谷キャンパスの学生は湘南キャンパス、それ以外の学生は所属するキャンパスに出席し、各キャンパスをオンラインで結ぶ方式で開催した。この日はオンラインを通じた全体説
第9号（2025）

明と、この日以降本研修までに必要な調査、組織作り、体制作りを行った。具体的には、研修に関する各種説明の後、生活班に分かれて班内での役割分担や行事の役割分担の決定、寄港地研修での希望調査などが行なわれた。第1回事前研修は、あくまでも今後の準備のためのきっかけづくりという形となった。

1.4 望星丸 事前見学会

2024年1月29日に、主に湘南・伊勢原・品川・渋谷・静岡の各キャンパスの研修学生を対象として望星丸の事前見学会を行った。参加学生の人数は湘南キャンパス出発組が16名、静岡キャンパスの学生を含む現地集合組が3名の計19名である。湘南キャンパス出発組は大学所有のバスに乘車し、午前9時に出発した。望星丸の都合と学生の日程を擦り合わせるのは難しく、試験日程と重なって参加を断念せざるを得ない学生が何人も生じた。望星丸と事務局、研修団の日頃の情報交換・情報共有を密に行い、日程調整を進めていくより方策はないものと思われる。一方で、見学会の船内では一等航海士から望星丸に関する色々な話を頂き、船上にいた練習生もボランティアで望星丸の簡単な見学会をしてくださった。参加者の満足度は高かったものと思われ、参加できなかった学生に対しても撮影した写真・動画や居室で測定した諸設備のサイズなどを生活班で共有する様子が見られた。

1.5 第2回事前研修（出港前）

コロナ禍以前の事前研修は、12月末に大学の所有する三保研修館で行われていた。第53回では、これを本研修直前に事前研修（出港前）という形で、2月18日から20日に望星丸内で開催した。研修団役員と研修学生が一堂に会したのは、これが初めてである。

この事前研修（出港前）では、12月の事前研修（研修団結成）では成しえなかった組織作り、体制作りが行われた。また、救急救命講習、在日ミクロネシア連邦大使による講義なども行い、本研修の準備を完了させた。

三保研修館時代の事前研修とは異なり、望星丸で行われる事前研修は「船の生活に慣れる」という事柄も大きな要素として含まれる。具体的には、望星丸で集団生活を営む上で必要な居室の整備、清掃場所や清掃方法、食事や配膳、ゴミの分別を含む船内生活のルールなどを学び、実際に体験した。つまり、三保研修館で行われていた事前研修と変わらない時間で、三保研修館で行われていた内容に船の生活も加えた研修を行わなくてはならず、事前研修（出港前）は分刻みの多忙なものとなった。また、望星丸停泊エリアには買い物ができる場所が限られること、感染症対策の観点から事前研修で乗船した後に下船を許可しなかったことから、船内で生活して初めてわかる必要物品などを買い足す機会がないことも、今後の検討課題だと思われる。

以上を経て、清水港での出港式を皮切りに、33日間にわたる本研修が始まることになる。

2 船内での活動

船内での活動は、大きく研修・行事・洋上クラブに分類される。本稿ではこれに、生活基盤を加えて、4つの項目で報告する。

2.1 研修

出航後に船内で行われた研修は、洋上講座、English Class（シンポジウム準備を含む）、寄港地事前調査である。洋上講座は、団役員全員がそれぞれ担当した14講座、乗組員による3講座（船長、機関長、一等航海士）の計17講座が実施された。また、マジュロでのシンポジウムのための準備活動として、English Classなどが重点的に実施された。寄港地事前調査は寄港地ごとに父島、マジュロ、ヤップ、宮古島の4グループに学生が分かれ、乗船後にそれぞれ各自で調査した内容を集約して、寄港地入港前に全体に対して発表をした。ここでは、洋上講座とEnglish Classについて取り上げる。

2.1.1 洋上講座

洋上講座は、小笠原父島を出港後の本研修6日目（2月26日）から、宮古島に入港する前日の27日目（3月18日）にかけて、全17講座を団役員全14名および船舶職員3名により実施した。それらのスケジュールおよびテーマを表1に示す。

表1 洋上講座実施結果一覧

	日程	担当者	タイトル
1	2月26日	笹川昇（工学部）	酒飲みの体質と遺伝子の話
2	2月26日	菅野正隆（首席一等航海士）	私の道
3	2月27日	松島佑介（職員）	海外研修航海の体験を就職活動に活かすには
4	2月27日	上河内信義（船長）	海、船とともに
5	2月28日	藤川知栄美（情報理工学部）	星の光はなぜ見える？
6	2月28日	岩本芳明（機関長）	船の機関について
7	2月29日	鈴木大樹（前半医師）	研修後悔にしない体調管理
8	2月29日	三沢大樹（児童教育学部）	日本における音楽教育のあゆみ
9	3月7日	長泰則（後半医師）	日本での心臓移植の現状と課題
10	3月7日	稲永敏朗（農学部）	タマゴの話
11	3月10日	清水宗茂（海洋学部）	マイクロプラスチックについて
12	3月10日	山口愛（看護師）	救急の現場から（医療システムや救急車の適正利用について）
13	3月10日	宮西宏明（職員）	プロジェクター・モニターの正しい映し方：PCとプロジェクター・モニターとの関係
14	3月11日	池谷美衣子（教養教育）	「経験から学ぶ」とは：成人教育学・超入門
15	3月11日	黒澤純夏（職員）	私が大学職員として学んできたこと
16	3月18日	Wayne David Devitte（語学教育）	Making Friends with Non-Japanese Speakers
17	3月18日	八木英一郎（経営学部）	意思決定の考え方

* 講座は1コマ50分程度、原則として午前中に学生食堂にて実施された。

* この他、出港前の事前研修では、ジョン・フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使を講師に迎え、船内での特別講義が行われた。

内容としては、それぞれの担当者の自己紹介に始まり、専門としている研究分野や担当業務に関する内容をわかりやすく解説するものが多く、団役員の立場からも、非常に勉強になる内容であった。また船舶職員からは船長、首席一等航海士、機関長に担当いただき、やはりこれ
第9号（2025）

までのご自身の生き方から得られた教訓や、船の仕組みについて分かりやすい説明があった。参加する学生も、前半は船酔いによる体調不良者の不参加が目立ったものの、後半にはほぼ全員が参加し、いずれの講座後にも制限時間を超える質問が相次いだ。

2. 1. 2 English Class

第53回海外研修航海の外地における寄港地は、マジュロ（マーシャル諸島共和国）とヤップ（ミクロネシア連邦）の2か所であった。寄港地での使用言語が英語であることに加えて、今回は3月5日にマーシャル諸島短期大学との学生学術交流シンポジウムが計画されていた。このシンポジウムは、学生全員がテーマごとに小グループに分かれてディスカッションを行うもので、シンポジウムの焦点は学生たちが現地のマーシャル諸島短期大学の学生と英語で意見を交わしながら積極的に会話することにあった。そこで、English Classは学生が積極的に参加し、現地の学生とのコミュニケーションを成功させるために必要な語学力を身につけることを目標に、Symposium Preparationと連動して編成された。English Classのスケジュールおよびテーマを表2に示す。

表2 English Class実施結果一覧

	日程		テーマ
General English Classes			
1	2月27日	Class 1	Basic introductions and getting to know each other.
2	2月28日	Class 2	Giving opinions and sharing information.
3	3月1日	Class 3A	What language do you need for the Majuro Symposium Part I?
4	3月1日	Class 3B	What language do you need for the Majuro Symposium Part II?
5	3月2日	Class 4A	Saying what you want to say for the Majuro Symposium Part I.
6	3月3日	Class 4B	Saying what you want to say for the Majuro Symposium Part II.
7	3月3日	Class 5A	Useful travel expressions Part I.
8	3月3日	Class 5B	Vocabulary review.
9	3月12日	Class 6A	Useful travel expressions Part II.
10	3月12日	Class 6B	Vocabulary building.
Symposium Preparation			
1	3月1日	Class 1	Practice and preparation for symposium (Japanese - English).
2	3月1日	Class 2	Practice and preparation for symposium (English).
3	3月2日	Class 3A	Practice and preparation for symposium (English).
4	3月2日	Class 3B	Practice and preparation for symposium (English).
5	3月3日	Class 4	Practice and preparation for symposium (English).
6	3月3日	Class 5	Mock Symposium.

*講座は1コマ45分程度で構成され、ネイティブ教員(Wayne)が講師/ファシリテーターを担当した。

*3月4-5日にマジュロ寄港(マーシャル諸島共和国)、3月13-14日にヤップ寄港(ミクロネシア連邦)。

English Classは基本的な英会話から始まり、シンポジウムの中で自分が参加するテーマについて何を話すべきかを母国語で考え、それらを伝えるために必要な語彙や方法に焦点を当てながら英語に翻訳し、口にだす練習が重ねられた。小グループの中で学生はそれぞれに進行のための役割を担うことで、英語学習への意欲を高めたり、語学力を発揮したりする機会が与えられた。なかには、英語でのコミュニケーションに自信がないにもかかわらず、より高度な役割を自ら引き受ける学生の姿も見られた。

学生の英語力は全体的にばらつきがあり、すべての学生が上達したわけではないが、一連の English Class の前後では学生の姿に顕著な違いが見られた。それは、シンポジウム後、そして以降の航海の間、ほとんどの学生が自ら英語でネイティブ教員と交流するようになり、自分の言語能力に自信をつけた様子が伺えたことから確認できる。外国語でのコミュニケーションの成功には必ずしも正確で厳密な文法は必要ではないということが実感を伴って理解された結果、学生たちの積極性を引き出したといえるだろう。

2.2 行事

船内では、事前に学生たちが担当班に分かれて企画準備した行事として、運動会・洋上卒業式（祝賀会を含む）・「階段パーティー」（解団パーティーにステップアップの意味を込め「階段」に名称を変更）が行われた。くわえて、研修学生の希望により学生幹部（学生長1名、副学生長2名、総務1名）を中心に企画されたクイズ大会が2回、天候に合わせて望星丸船員に開催いただいた星空観察会が2回、クイズ大会の副賞として望星丸の全面的な協力のもとで実施された一日船長体験があり、出航後に開催方法が研修団企画に変更された帰港式についても、学生有志が航海中に企画を練り上げ、団役員が介在して事務局とも連絡をとり、当日の運営まで行なった。

ここでは、第53回では当初の計画のなかった3つの行事、すなわち、帰港式・クイズ大会・一日船長体験を取り上げる。

2.2.1 帰港式

帰港式を研修団セルフプロデュースとするよう団長・副団長が事務局から打診を受けたのは、出港を間近に控えた1月24日であった。この時点では会場も決まっておらず、帰港式に関する組織作りも始まっていない状況であり、帰港式の行事体制などをしおりに掲載できるべくもなかった。そのため、航海中に急遽メンバーを募集する形で企画がスタートした。志願者によって構成されたこともあり、全員がやる気に満ち溢れ、様々な分野に高度な知識を持つ学生が集集することとなった。

検討の結果、帰港式は前半を「建学の歌」斉唱、学生長挨拶、修了書授与、研修団旗返還などフォーマルな内容とし、団旗返還後は学生企画としてややインフォーマルな内容で構成された。学生企画は団長・船長への贈り物、スライドショー、その他サプライズ企画で展開した。スライドショーは「91人のプレゼンター」という企画趣旨の通り、画像が放映されている間、保護者や関係者の席に研修学生が出向き、スライドに合わせて思い思いのプレゼンテーションをするもので、特に保護者に大変好評であった。企画から準備まで非常にタイトなスケジュールではあったが、積極的かつユニークな思考を持つ学生が集まり、円滑な企画・運営が印象的であった。

2.2.2 クイズ大会

クイズ大会は当初の計画にはなかったが、学生からの強い要望で実施された。クイズ大会は第9号（2025）

企画・立案から進行まで全て学生が自主的に行ったものであり、学生の自治意識の芽生えとして特筆されるべきものである。

第1回クイズ大会は3月6日の午後に行われ、研修学生の交流と一日船長体験の権利争奪を目的に班対抗戦として企画された。幹部からの依頼で団役員が自身に関する問題を作り、学生と団役員の交流を図った。結果として、団役員の知らなかった面を知ることができたり、難問を解くために班員同士のコミュニケーションが活性化するなど、交流を深めることができた。

第2回は3月11日の午後に行われ、研修団全体の交流を目的にした。そのため、チーム分けも生活班を解体して編成した。団役員チーム、上級生チームを作ることで競争心を煽り、盛り上げようとした。結果として、団役員チームに下級生チームが勝つなど盛り上がり、相互理解を深めながら一体感が深まったと研修団では好評であった。

2.2.3 一日船長体験

一日船長体験とは、研修学生のうちの一人が一日だけ望星丸の船長を体験できるという企画である。過去の研修航海でも恒例の企画であるが、今回の第53回の場合、当初からこの企画が組まれていたわけではない。というのも、一日船長を実施する日の決めかたは「いつ赤道を通過するか」などの節目を当てることが多く、第53回の航路は赤道越えが無いため、なかなか一日船長を選ぶきっかけが無かったためである。しかし本研修の最中に船長と研修団役員が話し合い、今回も開催する手筈となった。

このような事情のもと、研修学生は学生幹部を中心に自主的にクイズ大会を開催し、その勝者が一日船長となることとなった。結果としてクイズ大会を勝ち残った一人の学生が一日船長の権利を得たが、実際に一日船長となる日は船の運航に影響の出ない日時で行わなければならない。この日程調整は日頃の船と研修団との風通しの良さに比例して上手くいくものと思われる。

一日船長を経験した学生は、「とても感動した。まず、上下白の開襟制服、制帽を着用できることが楽しい。また、機関部や厨房部、船橋の点検は普段見ることのできない場所に立ち入ることができて素晴らしい。さらに、操舵や操船の体験は、独特の緊張感があって、命を預かる責任の重さを実感させられた。人生観の確立や職業選択のきっかけになるような素晴らしい体験だった」と感想を残している。これを直接経験したのは一名のみであるが、制服を着た一日船長と記念写真を撮ろうとする学生や船長の経験内容に関心をもって話を聞きにくる学生は多く、一日船長体験を契機に学生間のコミュニケーションが活発に行われていた。

2.3 洋上クラブ

洋上クラブは乗船前にTeamsなどで連絡を取りあいながら準備を行い、10クラブが活動を行なった。クラブ一覧を表3に示す。特に、写真・動画クラブはWebにおける航海日誌や航海アルバムで用いる多くの写真を提供した。また、

表3 クラブ活動一覧

	クラブ名
1	写真・動画クラブ
2	書道クラブ
3	球技クラブ
4	非球技クラブ
5	English communication club
6	手芸クラブ
7	テーブルゲームクラブ
8	アートクラブ
9	音楽クラブ
10	映画鑑賞クラブ

行事の実施や準備では音楽クラブ、書道クラブ、手芸クラブなども協力した。

2.4 生活基盤

上述してきた船内での活動は、なによりも船内での日々の生活に支えられる。船内という共同生活ではなおさら、生活環境の衛生を保ち、規則正しい生活が営まれていることが、体調の自己管理や良好な人間関係形成にとって不可欠となる。今回の研修航海では全期間を通して揺れが激しかったため、船酔いを訴える者は多かったが、出航前はコロナ、インフルエンザなどが流行っており、乗船前の体調管理の徹底を呼びかけた効果もあって、船酔い以外の体調不良者はほとんど出なかった。ここでは、生活基盤として、生活、総務、医療・看護を取り上げる。

2.4.1 生活

船内では、基本的には学生の自主性を重んじながら、班長会議にて設定したルールなどを通じて、集団生活を実施した。班長会議（20時～）および班ごとの会議（20時半～）を原則毎日行うことで、船内生活での細かなルール決めなどを行った。特に、班長会議では、「ゴミの分別方法」、「船内移動時の履き物（指を守るカバーやかかとが付いたクロックスである必要性）」、「節水への対応（食事当番やシャワーなど）」が多く議題に挙げられていた。

朝の点呼は、学生幹部のうち1名が持ち回りとなり、生活班長からの報告を集約後、当直団役員を通じて、団長および副団長に報告した。船酔い等により点呼を欠席した学生に対しては、医療チームにて状況把握と対応を実施した。

清掃は、担当場所を12ヶ所分け、事前に決めた役割分担に従って毎日実施した。清掃場所により必要とする人員数が異なるため、保健衛生担当の学生を中心に、余剰人員は居室の清掃を実施するなど、臨機応変に対応していた。

食事・配膳について、はじめは乗船経験のある海洋学部の学生が中心となり、以後は役割分担表に従って、当番制で実施した。当番以外にもボランティアとして協力する学生の姿も多く見られた。残飯を最少化するためにおにぎりを作り冷蔵保管すること（希望者が必要に応じて喫食）や、司厨部と連携し状況に応じて追加補充するなどの対応が自主的に行われた。

洗濯は、節水のため、1週間で5回の洗濯機使用を基本として、生活班を単位に洗濯可能日を割り当てた。シャワーは奇数班と偶数班で交互使用を原則に、運動会などの行事日には総残水量をもとに全員がシャワー可能とすることや、見積使用量（17トン/日）を大幅に超えること（22.5トン/日）が認められた際には、全員のシャワーを使用不可とした。さらに、班ごとに節水に対する努力目標を公言することで、個々での対応を徹底する取り組みを行った。

船内生活を通して、学部や学年が異なる集団であるなか、当初は意見の衝突が多く見受けられる場面も認められたものの、班長会議や班内会議などを経験する中で、他者を受け入れること、研修団全体としての視点を持つことができてきたことは、研修学生にとって大きな成長につながったといえる。なかでも、学生間の関係調整や団役員とのパイプ役として状況を冷静に観察し精力的に働き続けた学生幹部の貢献は、特筆されるものである。

2.4.2 総務

研修航海にはさまざまな団用品が必要だが、その準備はすべて出港前に行われる。研修学生の力も借りながら本格的に団用品の作業を開始したのは、1月17日であった。それ以降、週に2回から3回のペースで団用品の整理作業を続けていった。団用品の整理を進めると同時に、研修団ではクラブ活動や行事の相談がオンライン上で進められており、これらの研修活動に必要な物品があれば申告してもらい、それが過去の団用品の中に含まれているか、新たな購入が必要であるか、学内で借用できるものであるかの仕分けを進めた。購入物品の到着などを含め、湘南キャンパスの団用品整理作業は2月13日までかかった。団用品整理に参加する学生の人数は決して多くなく、かつ、メンバーが固定化される傾向にあった。2月14日には、湘南から清水港に団用品を運び、望星丸に積み込みを行った。約20人の学生の参加を得たが、湘南キャンパス・静岡キャンパスから参加する研修学生の人数を踏まえるとさみしい数字である。研修航海中は、事前の整理の甲斐があり、大きな混乱なく団用品が研修を支えてくれた。

通信について、望星丸では、インマルサット（国際海事衛星機構）を利用したインターネット使用が可能である。海外研修航海では、緊急時のために、Skypeを使用した遠隔医療システムが運用されている。清水港停泊時の出港前事前研修中の2月19日（1回目）、および、出航後の父島に向かう途中となる2月22日（2回目）に、望星丸と附属病院を有する伊勢原キャンパス間における遠隔医療システムの通信テストを行った。インマルサットを利用した通信料は高額なこともあり、とくに双方向動画配信を行う際のテスト時間は3分間以内に収まるよう計画し、双方向通信を確認した。

また、本研修中は、Web掲載用の航海日誌および航海アルバムのデータを事務局指定の専用メールアドレス宛に送信した。航海日誌は、団役員と生活班が毎日担当を交代し、日々のコメントおよび写真4枚程度で構成した。航海アルバムは、その日の研修内容、行事を示す内容の写真を送信した。船内で91人を対象とする記録写真は難易度が高く、特に航海序盤は船酔いのため、突如訪れるシャッターチャンスに対応できない時もあった。そんな時、写真・動画クラブに所属する学生らが、船内で起こる出来事を記録し、データ共有してくれた。写真・動画クラブには責任感を持った学生が多く所属しており、登舷礼といった公式行事の撮影も任せることができた。写真撮影時は腕章を着用し、優先的に撮影場所を確保させることで円滑な撮影を可能とした。

撮影した写真データは航海アルバムにも掲載していたが、研修中は基本的にネット環境が無いため、研修学生が見ることができる機会は限られていた。その問題を解決するために実施したのが、船内壁新聞である。新聞にはその日のベスト7の写真とコメント（Web航海日誌における団役員コメント）が掲載されており、読み物系の娯楽が少ない船内で話題となった。

また、記録担当の業務として航海中にSNSに関する注意喚起も行った。学生に伝達した主な内容は「迷惑行為・他者を不快にする内容」「飲酒・喫煙に関する内容」のアップロード禁止であった。特に飲酒・喫煙については誤解を招く行為も予防するため、成年者であってもアップロードを禁止した。迷惑行為については戦跡でのピース写真・寄港地住民の無断撮影なども禁止事項とした。

2.4.3 医療・看護

COVID-19が5類感染症へと変更となったことを受けて、乗船時および船内で明らかな感染兆候がないことをチェックしたのち、船内でのマスク着用は自己判断とした。

清水港出港後より、時化での船酔いが多く発生した。昼食後に多くの学生が嘔吐したため、嘔吐物の処理、酔い止め薬の内服の確認、飲水励行を指示した。発汗や頻回な嘔吐・内服困難となり、点滴を行った学生や団役員が若干名いたが、静岡キャンパスより持ち込まれた試飲用ポカリスエット・カロリーメイトゼリーの摂取もあり、3日ほどで全学生の船酔いは回復した。

衛生面では、学生食堂の毎食前のテーブルの拭き上げを徹底し、各学生居室と食堂にルビスタの配置を行った。学生居室へは手指消毒薬も1個ずつ配置した。食後の食器拭きはフキンの使用を避け、ソフキュアガーゼを用いて単回使用で清潔維持を保つことができた。

健康観察として、毎朝の点呼時に起床してこない学生の居室に赴き、食事・水分摂取状況の確認、頭痛や腹痛、消化器症状の有無、顔色などを看護師が中心となって確認した。食事時には、体調不良を訴える学生が食堂へ来ているかを確認し健康状態の確認を行った。精神的な不安や活動の制限（荒天にて甲板へ出られない等）・集団生活によるストレスに対しては、傾聴し個人の時間の確保などの対応を行った。

3 寄港地での研修

ここでは、父島、マジュロ（マーシャル諸島共和国）、ヤップ（ミクロネシア連邦）、宮古島の4島で行われた寄港地研修を報告する。

3.1 父島（東京都・小笠原諸島）

父島では、2月24日に選択研修として4つのコースが準備され、事前希望に従って「戦争遺跡」「自然観察」「ウミガメ観察」「クジラ観察」に分かれて実施された。

「戦争遺跡」は3グループに分かれてワゴン車に分乗し、それぞれガイドの案内のもと、父島に残る数多くの戦争遺跡を見学した。木々が生い茂る山中には、いくつも洞窟があり、大砲があり、道には空き瓶や薬莢、やかんなどが置かれていた。かつていた軍隊の気配を肌で感じられ、終戦から80年近くを経た今日に当時の痕跡を実際に見ることができたことは、戦争を経験していない世代にとって戦争を具体的に考える極めて貴重な体験となった。

「自然観察」は5グループに分かれ、それぞれガイドの車で島内を巡った。小港海岸では海岸周辺の植物を観察しつつ、島の土地や植性の成り立ちを学習した。中山峠を上り、山頂から小港海岸と隣のコペベ海岸を見ることができた。桑ノ木山入口の道路わき斜面を徒歩で下り、軍事施設跡のガジュマル林と周辺の植物を観察した。小笠原国立公園に入り、ウグイスの鳴き声や保護された貴重な植物、例えば絶滅危惧種のムニンノボタンを観察することができた。

「ウミガメ観察」は2グループに分かれ、小笠原海洋センター（運営：NPO法人エバーラスティング・ネイチャー）で研修を行った。センターでウミガメについて1時間程度の専門的な講義を受けた後、実際にセンターで飼育されているウミガメを観察した。その後、センター職員

指導のもと子カメの甲羅みがき（苔などをブラシで落とす作業）と餌やりを体験した。直接生物に触れることができ、学生にとって大いに癒される時間となった。対応いただいたセンター職員の一人は東海大学海洋学部出身で、こうした本学卒業生との出会いは学生にも良い刺激になった。

「クジラ観察」も2グループに分かれ、ボートで南島に向け移動した。その途中、ザトウクジラを複数回にわたり発見することができた。30分ほどで南島に到着し、上陸後は移動可能なコースを徒歩で巡り、南島独自の自然や生態系について学ぶことができた。ボートに乗船していたガイド1名が引率し、各スポットでの集合写真の撮影やさまざまな質問に対して、丁寧に対応いただいた。いずれのグループもクジラを観察でき、参加学生にとっては大変貴重な経験となった。

3.2 マジュロ（マーシャル諸島共和国）

マジュロでは、3月4日に選択研修、3月5日に学生学術交流シンポジウムという2つの研修があった。

3.2.1 選択研修

マジュロの選択研修では3つのコースが準備され、事前希望に従って「海洋自然学」「文化社会学」「地形学」に分かれて実施された。寄港地がウリガ港からデラップ港へと変更になったため（車で15分ほどの距離）、いずれのコースも所要時間や移動手段の変更を余儀なくされたが、前日に現地入りしていた千葉雅史スーパーバイザー、株式会社東海教育産業ESツアーの中川齊氏および現地旅行代理店の尽力により、研修を実施することができた。

「海洋自然学」では、ボートでエネモネ島に移動し、マジュロならではの青い海、白い砂浜で囲まれた珊瑚礁の中、シュノーケリングを楽しむことができた。シュノーケリングに関しては、医療チームが同行し、エントリーの場所、栈橋より沖に出ない（腰の高さ程度まで）、ライフベスト着用など十分な安全管理のもとで行うことができた。美しい海を体験し、海洋環境保護の意義が経験を通して再確認された。

「文化社会学」では、マジュロ市内にある博物館や企業等を徒歩で巡り、現地の歴史や文化、生活について直接触れることで、国際的な見聞を広めるものであった。ウリガ地区で現地スタッフと合流し、マーシャルで唯一の博物館であるアレレ博物館で学芸員の方の解説と展示物を通して、マーシャルの生活文化や歴史、ビキニ環礁（世界遺産）で行われた米国による水爆実験の歴史と、現在まで続く負の影響等について学びを深めた。次に、日本人が現地で起業した建築資材の企業が併設する日用品小売店（MJCC）で、地元の民芸品等の土産物や船内で使用する生活用品等の買い出しを楽しんだあと、マーシャル伝統カヌーハウス（WAM）を訪問した。WANは、アウトリガーカヌーの伝統継承と普及および青少年に対する教育機関の役割を担っている施設で、カヌーハウスと幾つかのカヌーを見学した。

「地形学」では、マイクロバスに乗って一路西へ向かった。車窓からは、左右いずれにも美しい珊瑚礁の海が見られ、自分たちが非常に細長い島にいることが実感された。途中、パンク状

態のゴミ処理場やマジロ国際空港を見ながら、日本人戦争犠牲者慰霊碑に到着した。日本からはるか南に何千キロも離れたこの地で命を落とした先人を思い、日本の方角に向かって立つこの碑に手を合わせた。バスはさらに西へと向かい、ローラ島へ到着した。ローラビーチは、内海側、外海側ともに白い砂、青い海の、まるでガイドブックにあるような景色の広がるところであり、帰りのバスの時間の問題がなければ、写真だけでなく、少しでも海に入りたいところであった。同行していただいたMJCCの方の車内解説もあり、ただ美しいだけでないマジロの現状を見ることができた。

なお、選択研修を引率する上で、即時判断や臨機応変な対応が必要になることがあるため、寄港地において団役員同士が連絡できる手段の確保と連絡体制は必要である。

3.2.2 学生学術交流シンポジウム

3月5日には、マーシャル諸島短期大学（College of the Marshall Islands：CMI）を会場に、約3時間半にわたる「日本とマーシャル諸島の学生シンポジウム」が開催された（東海大学主催、マーシャル諸島短期大学共催、国際機関太平洋諸島センター後援）。シンポジウムのテーマに「グローバル・シティズンシップ：日本とマーシャル諸島の学生がともに考える未来」を掲げ、異文化コミュニケーション・教育・海洋・農業・健康という5つのテーマを設定した。学生は事前に希望したテーマに分かれ、かつテーマ内でさらに5名ずつの小グループを編成して役割を決めて船内で準備を進めてきた。シンポジウム当日は、CMIのキャンパスツアーを実施したのち、研修学生の小グループにCMI学生1-2名が参加することで、小グループ単位で英語でのディスカッションを実施した。約1週間をかけて船内で事前準備を重ねてきたこともあり、学生にとってそれぞれに緊張感と達成感を伴った有意義な経験となった。なお、オープニング・セレモニーでは、4名でつないだ学生代表スピーチと船内で練習してきた「建学の歌」合唱を披露した。

3.3 ヤップ（ミクロネシア連邦）

ヤップでは、2日間にわたって全体研修が行われた。3月13日は広場（Yap Living History Museum）にて、望星丸ウェルカムイベントが行われ、当日配布されたココナッツ引換券でフレッシュココナッツをもらい、葉のお皿でローカルフードを選んでそれぞれが試食を楽しんだ。その後、花のレイやバッグなどの手工芸品の制作体験やプレゼント、ビンロウジュ噛み体験、コプラ（ココナッツ）の皮むき体験、グループに分かれてニコール村の若者の引率の元でマタデ山へのハイキングを行った。抽選会の後、アテリウ村の行進踊りの披露があった。

翌14日は、3グループに分かれて順次、戦跡めぐりとカダイ村訪問（集会場や石貨の見学）を行った。カダイ村では全員がレイでの歓迎を受けた。移動バスには現地の方が同乗し、その都度英語で解説をいただいた。カダイ村でも村民から英語で説明があり、質問する学生の姿も見られた。

3.4 宮古島（沖縄県・八重山諸島）

宮古島では、2日間にわたって研修を行った。3月19日は、船内で井上美香氏（一般社団法人 NEREIS（ネイレス））から説明を伺い、保良漁港奥で研修団全員によるビーチクリーンを実施した。その様子は翌20日付『宮古新報』に掲載された。ビーチクリーンでは想像を超えるゴミの量や種類に驚き、時間いっぱい真面目に取り組む姿が好印象であった。バスでスーパーに立ち寄ったあと、公設市場で解散し、事前に申請した学生グループでそれぞれ夕食を楽しんだ。

翌20日はグループ別研修で、「シギラ温泉」「海中公園と池間大橋」「熱帯植物園と工芸体験」に分かれて実施した。いずれも、昼過ぎに公設市場に戻り、自由に昼食を済ませて13:30に再集合してバスで船に戻った。

4 海外研修航海の意義と課題：研修航海の経糸を紡ぐために

4.1 研修航海の本質を変えずに維持すること

海外研修航海は東海大学が誇る究極のFD活動であり、究極のアクティブラーニングである。また、本学が他大学の追随を許さない「東海大でしか経験できないこと」として無二の切り札となつて然るべき教育プログラムである。これらの要素が研修航海の魅力と本質につながっていることは明らかであろう。特に第53回海外研修航海ではコロナ禍の影響で他者との深い関わりが制限されてきた学生たちが多く参加しており、彼ら彼女らにとってこれまで体験できなかった心に残る有益な体験になったことは想像に難くない。

今回の研修を通じ、これまでの海外研修航海が40日前後の日程を要していたことの意味が確認された。最初の1週間は船内に慣れることで精いっぱい、次の1週間で新たな人間関係が生まれ始める。ただし、この2週間で構築される関係は声の大きな者が上面だけで作り上げるものに過ぎない場合があり、人間関係構築に時間がかかる者の魅力が周囲に理解されはじめ、改めて構築される新たな（真の）関係が見えてくるのは3週間目以降となる。最後の2週間は、もう本当に日替わりで輝く学生が登場し、終わってみれば皆が皆、どこかで主人公となる場面が生じている。今回の研修航海は33日間の日程であり、過去の研修航海と比べると明らかに短い。それでもなお、なんとか過去の研修航海で皆が体験してきたことを今回でも感じてもらうことが出来たのではないかと、研修航海の本質を突く経験を今回の学生にも経験してもらえたのではないかと考えている。すなわち、今後の研修航海の航路がどうあれ、日程的には今回以上、最低でも今回と同様の日数が学生の経験値向上につながるのではないかと。世の中の流れに合わせて海外研修航海も変化するべきだという意見があるなら、それはもっともなことであるが、その際には、海外研修航海で得られるもの、期待される教育的効果がどのようなものかという本質の議論を十分に尽くすべきである。その変えてはならない本質が維持される範疇において、その体裁は変化していくものであるのかもしれない。一方で、その本質に関する議論を疎かにしたまま、変化すること自体を目的にするかのような考えがあるとしたら、それは評価に値しないものであろう。

4.2 団役員間の化学反応

海外研修航海では参加する研修学生が中心であることはいうまでもないが、今回の海外研修航海においては団役員の間でも化学反応ともいえるべき良い変化が見られた。団役員はそれぞれの所属部署から選出された者であり、ほぼすべての者が互いに初対面の関係であった。6月の第1回団役員会議、8月の団役員を対象とした体験乗船ともに、全員の出席は叶わず、その後も全員が揃う機会は失われ、14名の団役員全員が揃ったのは船内の事前研修（出港前）が初めてであった。そのような状況にも関わらず、団役員は個々の特性を発揮しながら結束し、学生の経験値の向上および安全確保に貢献した。結果として団役員同士の化学反応は良い方向へ進出したのではないと思われる。

一方で、この化学反応を上手く進める具体的な方策が何なのかと考えると、その答はひとつではなく、各回の研修航海によっても異なり、さまざまな要素が絡み合っているのだと思われる。第53回海外研修航海では個々の団役員がそれぞれの立場から学生のことを思い、より良い研修を目指すという同じ方向を向いており、そのことが結果として良い化学反応につながったものと考えられる。

4.3 課題

海外研修航海が中断されていた5年間、海外研修航海事務局や望星丸乗組員における大幅な組織変更や人員の異動により、これまでの経験やノウハウが必ずしも継承されず、第53回海外研修航海では手探りで進めざるを得ない部分や、出航後に準備不足が判明し船上から頻繁に陸上へメールの送受信を行う必要が生じた。第53回研修航海時点での望星丸のインターネット環境は劣弱であるとともに、特に行程の前半は船酔いで苦しむ団役員・研修学生が多く、船内で陸上と同じように業務を行うことは難しかったため、出航前に可能な限り準備を終えておくことが望ましいことを改めて確認した。

また、今回の研修先となった太平洋の島々では予期せぬ変更や遅延が生じることもある。今回は研修全体に影響を与えるような大きなトラブルは生じなかったが、マジュロでは着岸を予定していた港が急遽変更となり、当初予定していた徒歩での移動が不可能となったため、寄港地研修のスケジュールの見直しや新たな移動手段の確保などの問題が生じた。これらへの対処を乗船している研修団が行うことはほぼ不可能であり、寄港地で研修団をサポートする要員が必要不可欠となる。また、寄港地での短い研修日程の間で充実した研修を行うためには、事前踏査などを行い、寄港地について十分に事前に研究しておくことも必要不可欠となる。今回はコロナ禍による5年のブランクや円安の進行による諸費用の増加もあって、事前の準備や想定が行き届かない面があり、父島への事前踏査では副団長が、寄港地研修においては団役員や事務局が、手弁当で対処しなければならない場面が見られた。これらを解消し組織的に進めていくことが必要である。

また、今回は航海中に海が荒れている日が多かったため、船内にとどまざるを得ない日が多く、運動会においても船が揺れるため、揺れても安全に実施できる競技に絞って実施せざるを得なかった。さらに航海を通して日の出、日没の時間が遅かったため、海が荒れていない日

でも、朝の体操（6時）はほとんどを船内で行わざるをえず、星空観測会なども実施が限られ、ブリッジ（操舵室）における数名程度の小グループによる観測とせざるを得なかった。可能であれば、航海ルートに赤道付近を加えるなどして、揺れが少なく安全に甲板上で活動できる日程を確保することのできるルートにすることが望まれる。

4.4 研修の質向上と将来展望

時代とともに海外研修航海のあり方は変化して当然であるが、研修内容の質においては進化こそあれ、退化や停滞するようなことがあってはならない。そこで過去を振り返りつつ、今回の研修の質を俯瞰し、さらに将来につなげたい。

本学における研修航海の歴史は長いが、まず指摘される大きな転換期は、現在の望星丸（船舶識別符号JGAW、総トン数2,174トン）が就航した1993年度の第26回研修航海（実際の研修航海は翌年2月に出港）であろう。それまで使用していた東海大学丸二世、望星丸一世、そして二世と比較して、現望星丸は船速が向上するとともに乗船可能人数も増加した。これは限られた航海日程の中で訪問可能な海域の拡大につながり、寄港地候補の選定が多様化すると同時に、より多くの学生に教育を施すことが可能となった。

次の転換点は、海技士資格取得要件の緩和により、遠洋航海の実施海域が見直された2012年以降である（「船員（海技者）の確保・育成に関する検討会報告」平成24年3月27日、国土交通省海事人材政策課）。この要件緩和により、「実習の実施海域を遠洋航海を開始する港を起点とした半径2,000マイル以上の海域とする」とされ、研修航海においては日本を出発して東南アジア諸国を歴訪できる可能性が生じた。実際には第45回、第46回、そして第51回の航海を東シナ海から南シナ海の海域で展開した。

これらハードウェアに起因する変化もさることながら、船内あるいは寄港地上陸の際に提供されるソフトウェア、すなわち教育そのものの変化も顕著である。教育を提供するには十分な事前準備が必要であり、現地の状況把握と研修計画の立案がその成否を大きく左右する。しかし、インターネットなどのICTツールが十分でなかった時代には、電話やファクシミリ、あるいはテレックスなどを駆使しても研修準備は困難を極めたに違いない。その結果、寄港国を訪問すること自体が目的となり、上陸して初めて研修行動を検討するケースも散見された。しかし、2000年以降の加速度的なICTの進歩により、研修計画は周到に練り上げられるようになり、教育の質は回を重ねるごとに向上してきた。特に第41回研修航海（2010年2月実施）以降は、地上研修の充実度が洋上研修を上回るほどに成長したと考えられる。

一方で、近年の研修航海を取り巻く環境は、2019年から蔓延したCOVID-19や急激な円安、世界情勢の緊張に伴うエネルギー価格の高騰など、研修運営にとって好ましくない要因が複雑に絡み合っている。さらには5年間のブランク中に行われた学内組織の変更や人事異動の影響もあり、第53回研修航海ではコロナ禍以降初めての海外航路に挑んだものの、過去の経験を十分に活用できなかったが、本学の海外研修航海初となるマジュロにおける学生学術交流シンポジウムを海外研修航海で初めて成功させた。研修の質向上を遂げた背景には、それを支えるために割かれた労力や時間、熱意、そして費用が相応に必要であったと振り返る。

八木英一郎・笹川昇・鈴木大樹・長泰則・山口愛・藤川知栄美・三沢大樹・清水宗茂・
稲永敏朗・池谷美衣子・Wayne David Devitte・宮西宏明・松島佑介・黒澤純夏・千葉雅史

コスト削減だけに注目して生命の安全を軽視し、研修の本質が何であるかを見失ったまま「何か新しいことをしよう」と変化させること自体を目的化する風潮は厳に戒めるべきである。それは改革とは呼べず、迷走あるいは後退といわざるを得ないだろう。次回以降の海外研修航海を進化させるには、憶測や推測に頼らず、経験に基づいた解釈、データや理論で裏打ちされた分析手法、実績と運営ノウハウなど、過去から今日に至る先人達の知恵を十分に学び取ることが肝要である。

謝辞 東海大学第53回海外研修航海を実施するにあたり、ご支援ご協力をいただいたすべての皆様に心から感謝申し上げます。

